萬葉集略解 十三下

柳田文庫
文庫11
A 104
20

御佩牙、劔池之、蓮葉雨、渟有水之、往方無
みはかしをつるぎのいけのはちすばにたまれるみづのゆくへなく
我為時雨、應相登、相有君牙、莫寝等、母寸巨勢友
わがするときあふべしとあひおもへるきみをないねそとはゝきこせども
吾情、清隅之池之、池底、吾者不忍、正
わがこゝろきよすみのいけのいけのそこわれはわすれじたゞにあふ
相左右二
あふまでに

みはかしを枕詞、劔の池應神紀十一年十月作劔池軽池鹿垣池厩坂池、諸陵式に劔池島上陵 高市郡、 舒明紀瑞蓮生劔池、一莖二花とあり、たまれるみづは蓮の葉にたまれるがあはれにて、それちるを恋のおもひのゆくへなきにたとへたるなり、集中たまれる、みはかしを上に相

まさなはねるを、念はあひめつるを、此詞とは離つれて母はいさめ
るを、きこえてはまゆのつまひきせらるゝといふを、池の底は、[illegible]
ゆゑよしなを尋よ、不思は[illegible]とよみたるを、元暦本忍を志とよみたるは志は忘
の誤なるべし。こは、わすれずと訓て、清濁池は、堀河院御庚一首にまみ
ぎれぬとよみねば、此の歌をつゞき清きみの池とよめるも、太和
の人あやまりなるべし

反歌

古之神乃時従會計良思今心文常不所念

いにしへのかみのときよりあひけらしいまのこゝろもつねわすらえず

念は忘の誤也、上は妻一の御代より今の世にかへし給ふをこれを云つせ

ふりつまとあひそふらむといふことを申すなり

右二首

三芳野之真木立山爾青生 山菅之根乃 慇懃

みよしぬのまきたつやまにあをにおふるやますげのねのねもころに

吾念君者天皇之遣之萬萬 或本云王命恐 夷離國治爾登 或本云天疎夷治等

わがおもふきみはおほきみのまけのまに／＼ひなさかるくにをさめにと

群鳥之 朝立行者 後有 我可将戀奈客有者

むらとりのあさたちゆかばおくれたるわれかこひんなたびならば

君可将思言年為便将為須便不知 或書有足日木山之木末爾句也 延津田乃

きみかおもはんいはんすべせんすべしらに あしひきのやまのこぬれに はふつたの

歸之 或本無歸之句也 別之数惜物可聞

かへりの わかれのあまたをしきものかも

青生は重生の誤にて、ひろくはびこれる或本あをぞらるひろときあふといへ
ひろくむしくるの根句、或本あしひきの山のこぬれの一句ありて、延津田乃の

下條之二字ハ誤也。或本に依て改つき也。情物の下有の字落たるか。さらば
あるものと訓べし。男の待る女のあるなるべし。心ハ明らけし

反歌

打蟬之命乎長有社等留吾者五十羽旱将待

うつせみのいのちをながくありこそとゝまれるわれはいはひてまたん

旱ハあれこれとあれど、あやまりて旱と訓得ず、旱ハ誤字

右二首

三吉野之御金高爾。間無序。雨者落云。不時曾。雪者落云。其雨。無間如。彼雪。不時如。間不落。吾者曾戀。妹之正香爾

みよしぬのみかねのたけにひまなくぞあめはふるといふときじくぞゆきはふるといふそのあめのひまなきがごとそのゆきのときじくがごと

ひまもおちずあれはぞこふるいもがたゞかに

金ハ缶を誤れる事、考の耳我嶺とある所に委し。
引考べし。正香ハ本の字ハ香を誤れるなるべし。此哥ハ反歌の末、好まれべし。
意ぞとまる。本ハ其時にて妹をよそに見て、又しその何とぞいへれ
ぬるを。正香ハまさかのといふハ見之。正香直香とあれ。たゞかと訓べし。
此やわがきてまみえけるにあらそひかくての訛てまさかの直香といふこと
なりけり

反歌

三雪落。吉野之。高二。居雲之。外丹見子爾。戀度可聞

みゆきふるよしぬのたけにゐるくものよそにみしこにこひわたるかも

右二首

打久津。三宅乃原従。當土。足迹貫。夏草乎。

うちひさつみやけのはらゆひたつちにあしふみぬきなつくさを
腰爾莫積如何有哉 人子故曽 通賛文五字諸諸名
こしになづみいかなるやひとのこゆゑぞかよはしゝあこらへあく
母者不知 諸諸名父者不知 蜷腸 香黒
ちゝはしらせずはゝはしらせずみなのわたかぐろき
髪丹真木綿持阿邪左結垂 日本之黄楊乃小櫛乎抑
かみにまゆふもてあざさゆひたれやまとのつげのをぐしをおさへ
刺刺細子 彼曽五百嬬
さすさすたへのこはそれぞわがつま

打久津の津は須の借なり、うちひさすと訓べし、冠辞考にくはし、桜子考十四
宇知比佐都美夜能瀬河伯能とよめれば、須と都と通へば、
かくもいへるなるべし、次を次と、沼を沼と、散を散と、なども多し、みやけの原

景行紀令諸国興田部屯倉、これより国々にみやけありしなり、がく
されば蔵内なるべし、ここに直に見るとたる苗る、當の字など
足又常陸の例などにて、當は常の借にて、あふしぬきなるを従ていい
ちんとくくいて、夏草なるねつきなきことなれば、夜をなどして、まて
十九降るを腰になづみなどして、回ることいへるやうに、いへるなるべし
き嬬のごくあれなやくく煩りしき語と通ずべしと、みづから何をそのけにい
ちかみ、あこは他よりこれをさしていへること、うべなし、仁徳紀などにみえ
みしわがおもきみ手倍儺といふことを諸に名ともいへり、が
点の義なるなるべし、契沖をはじめもしといへるなどもしといへり、父母
ならせずして通ぜるれば、よそくの見つるは、其の父とする子とかいひて、次へ
かこよるかと解く、こなのうへ、桃嫁はかくあさ髪をの句より、嫁かなることそれ
をらふ、真ゆふもて、其は借の借むる句、阿邪左はそし、何都良の借なるが

かつらと何ぶしと為りくれき字も云或人説、阿邪たのたハ尼の誤にて文(アヤ)
のをちすへし髪ハ本綿と文へゆひてあらへこれの白髪て本綿とつく
と申ゞる事もく白髪のごとくに本綿をつくるよしといへり、其説よろし、やまの
の枝向をハ大和山邊郡大和郷のすまくいてこる都氣(ツゲ)といふ木のまさを、
黄楊といひ篇りせしるえみハ大倭より植を出せしのおほへさそ、様ハ
髪のおさへあれバ、伽子の乙利の字ハ數の誤なるべし、志きこさへハうる
をしくやりくのあるきあをとりひて好きる絡うとる肴婦きあらしけ
の餘まくりし、莫積の莫ハ麿なり奥に化る

反歌

父母爾不令知子故三宅道乃夏野草乎菜積來鴨

ちゝはゝにしらせぬこゆゑみやけぢのなつのゝくさをなづみくるかも

たゞ母父しらせずに云係へりとも聞べし、なゆゑハなるなゐをのこと

右二首

玉田次不懸時無吾念妹西不會波赤根刺
たまだすきかけぬときなくわがおもふいもにしあはねばあかねさす
日者之彌良爾烏玉之夜者酢辛二眠不睡爾妹戀丹
ひるはしみらにぬばたまのよるはすがらにいもねずにいもにこふるに
生流為便無
いけるすべなし

よすがらハ終夜のこゝろなりけし

反歌

縦恵八師二二火四吾妹生友各鑿社吾戀度七日

よしゑやししなんよわぎもいけりともかくのみこそわのこひわたらめ

火ハ去の誤にて、二二ハ四の字、去ハいぬるとよむるれバしなんとよむ字なり、七日ハ

右二首

見渡爾妹等者立志是方爾吾者立而思虚不安國

みわたしにいもらはたゝし このかたにわれはたちて おもふそらやすからなくに

嘆虚不安國　左丹漆之小舟毛鴨玉纏之小楫

なげくそらやすからなくに さにぬりのをぶねもがも たまきまきのをかい

毛鴨榜渡乍毛　相語妻遠

もがも こぎわたりつゝも あひかたらめを

たゝしハたちと延ふ。此歌は思ふよをかけて詠る歌のもとを成りて 相語の下妻

八巻の係りもかくてもハまくと見え、集中 あまたあり。相争ふてなる

例多し

或本歌頭句云

己母理久乃波都世乃加波乃彼方爾伊母良波多志己乃加多爾和禮波多知氐

右の或本のうたの頭句ハかくてあるなり

右一首

忍照難波乃埼爾　引登　赤曽朋舟　曽朋舟爾

おしてるなにはのさきに ひきのぼる あけのそほふね そほふねに

綱取繋　引豆良比有雙雖為　曰豆良賓有雙雖為

つなとりかけ ひこづらひ ありなみすれど いひづらひ ありなみすれど

有雙不得敍　所言西我身

ありなみえずぞ いはれにしわがみ

おしてる枕詞、あけのそほ舟ハ朱の赭舟也。巻十四まきにもまその麻曽保の

いろにでてしまはぬ赭舟也。丹土の名也。丹土もてぬれる

俣今俣
二誤

舟をもの、うつるをかけてまでハ序く、ひこづらひハひこづらひと此よく、
かつらとかづらひといふハなしつつハ連のことく、古事紀にかたハせれバ此許(とこ)
豆良比といふと同じ、川よもるうちに有なるみをれこハ嫁夫と来をく、
みをさまびあんともれとりくいれき、室をあなみハあかいる
みをく人のりひさつるを君といひて年ふるまんハあくとひしめぐりつれ
いかみゆるしくよりとられとえものあくえざれバいとれよしと詞、又よの
序にかなずといひてを能るべしいひづくいハひつかと迫ろえ、言連の
ことなる

右一首

神風之伊勢乃海之朝奈伎爾来依深海松。暮奈藝爾
来因俣海松深海松乃。深目師吾乎俣海松乃復去反。
かみかぜのいせのうみのあさなぎにきよるふかみる、ゆふなぎに

きよるまたみるふかみるのふかめしわれをまたみるのまたゆきかへり。
都麻等不言登可聞思保世流君
つまといはずとかもおもほせるきみ
武は深海松長海松などの名にてまさあれバ俣みるといふべしんハ又立隠
嫁夫と来べきあれバ、おなじのあるをたちたをうれとりくたるハ桃の別ふ
隠く女のおびつるるおもひを、慰めてよろこぶるあるべし、俣を本俣子拝、
俣も字ちふことねど股と役とするより混ぜたるならんこ

右一首

紀伊國之室之江邊爾。千年爾障事無。萬世爾
如是將有登大舟乃思恃而。出立之。清瀲爾。
きのくにのむろのえのべに、ちとせにさはることなく、よろづよに
かくもあらんとおほぶねのおもひたのみていでたちの、きよきなぎさに

毛ヲ今長ニ誤

朝名寸二来依深海松。夕難伎爾来依縄法。深海松之。
あさなぎにきよるふかみるゆふなぎにきよるなはのりふかみるの
深目思子等遠縄法之引者絶登夜散度人之行之毛爾
ふかめしこらをなはのりのひけばたゆとやさとびとのゆきのつどひに
鳴兒成。行取左具利 梓弓弓腹振起 志之岐
なくこなすゆきとりさぐりあづさゆみゆばらふりおこししのぎ
羽矣二手挾。離兼。人斯悔。戀思者
はをふたつたばさみはなちけんひとしくやしもこふるおもへば

寔は和名抄に紀伊牟婁郡牟婁にて有、今年なくし家に吏生なりて在し
人妻となるく本園へ仰しおもにかくよろしの清きなぎさといふべき下五句を不の
さまあへて、旬中の意え、なるはのりまで手七よりよりて、絶ようで絶しといひて、そのゐ
しかるし妻の死ぬるとて、ゐいそれき寔をも出立之いいでたちのと訓て清

きちさきなるに、妻を出立し此松原とよみたるにて、同しさまに見ゆ。下の
深めしこらとつゞけたり。さらば出立のは、集中吏生の提をぐくよれるそくさ也。
粧香てん、まし人の言、行之の下毛をとく本長に飛るは誤て一わをは傳く誤つゞく
ひとよむべし。翁のをゆきとりさぐりのゆきは靫にて、取さぐりは手を探へやるつ、
靫の矢探取て、靫に行の字を借るるはいぶかし。刹なりと見ゆと、もれき借字は
清濁にかゝはらぬ例なれど、靫に行に當るは、甚しくいぶかし。ここは室本は誤あれば
まま寔ならべし。弓腹の腹は彇の借なるべし。ゆばらふりおこしは神代紀の稜威
也し翁の説之されど、古くの記に弓腹としもあれば、さてあるべし。又此句より次の
人之とこの哥二首とも長歌なるを、亂て一首の中にみだるすゐいそれ
き、寔出之これは官人などの紀の國へまかるに、妻の如く法なるを見ていふ
らひならちてせなる女をおいれて、京へ帰りよる時のおみ来の男のよくるこの
宮のにのべは何し難も、たよはいつるよくぶひたのことをしる、之は深めしこらをのみへ

うつそみのまおの七句ハ序之川けハ中とハ妻ハの方の川けハ終るめくりや、
まかも絶て別とく、さゝ人の思ひのでひハ人さる事人の手くおのれハ
年をもさきぐてるなお行とうきぐうハ嬰児の遊行て、翁をさぐすとあらく
この女のおのれを業ひて、ともつきもどひるとゆふ様ちまでせ句ハ又序ハ
まちまち人ハかのとりつきもぞのぞし女を川ちあちておれつるをいふ人
と八郎氏をさそてもあちるおれし人ともかしく思ひつくよう、こうる己く
ひいしかく云つるを出てはくこれ終りなり

石一首

里人之。吾丹告樂。汝戀。愛妻者。黄葉之。散亂

さとびとのわれにつぐらくながこふるうつくしづまハもみぢバのちりまがひ

有神名火之此山邊柄。或本云彼山邊 烏玉之黒馬尓乗而河瀬乎

たるかみなびのこのやまべゆぬばたまのくろこまにのりてかハのせを

七端渡而。裏觸而。妻者會登。人曽告鶴

なゝせわたりてうらぶれてつまハあへりとひとぞつげつる

妻ハ俗のかたりでいふものにて之也、七瀬わたりてハ巻七泊瀬川七瀬の淀
とよみ、瀬の多きをいふ、うらぶれてハ悲しく物思ひするよく、つまハあへりとハ
夫にハあへりと、喪を送る事をいへる也、死せる夫におくれて悲しくて
いへるとの、それ死、こハちかひ、これハ此女の夫とを男の或人のみちにてまたき
ることを、こも女の傍にて、女のなげくる之様、云ふハあしじといふ

反歌

不聞而。默然有益乎。何如文。公之正香乎。人之告鶴

きかずしてもだもあらましをなにしかもきみがたゞかをひとのつげつる

喪送の時のさまを先ときゝ、是ハ婦妻にハあらで、よそれまてあはれなる妹のよ
めるとも、いはれきこ、先きちが後ならバ換言あらかじめて、大の古歌と同じさるなり

よし、正本ハさるよし

右二首

問答

物不念。道行去毛。青山乎。振放見者。茵花。
ものおもはでみちゆきなんし。あをやまをふりさけ見れば。つゝじばな。
香未通女。櫻花。盛未通女。汝乎曽母。吾丹依云。
にほへるをとめ。さくらばな。さかゆるをとめ。なをぞも。われによすてふ。
吾叫毛曽。汝丹依云。荒山毛。人師依者。余所
われをもぞ。なれによすてふ。あらやまも。ひとしよすれば。わがよそるとふ。
留跡序云。汝心勤
よるともぞいふ。なでこゝろゆめ

石船ちかんしハ石船ちかんをものゝ、花をめづるまれ花の色妹の色を愛るよし、

青山をとは春山をいへる也、さくは青は春の色の、石船ちかきにをかしき
妹のいへるてふ言は、つゝじ花の色いまだ十五六の女なるゆゑはいふなりと
いへるも未通女にあらねど、われをぞも。二句は物語文、吾叫の下毛曽一
本曽毛とあるよし、よそるとは、互におもひあへるをかたらふこの人にまたの
人もいひよするよし、荒山をも人のいひよすれはよるといふ
心の代てよせよといふ詞のありくいへるこの、その詞を、いはゞいひおきてな
よしよせて、汝がゆめはたのめく、いひよせしことのあるは、遂に志の来る
む、汝がゆめ遂ならんて、おもへよとしたる、宅なりも、余所留跡序云はよそる
よぞ、とあるべしといへり、是非あるべし

反歌

何為而。戀止物序。天地乃。神乎禱迹。吾八思益
いかにしてこひやむものぞ。あめつちのかみをいのれど。わハおもひましそて

たのもしきハ古代の言なるを此歌にハもちふまじけれバ後人のてを加へたるなるべし、

今ハ略けり

然有社。歳乃八歳叫鑽髪乃。吾同子叫過、橘

しかれこそ。としのやとせをきるかみの。わがおなじこをすぎ。たちばなの。

末枝乎過而。此河能下文長。汝情待

ほつえをすぎて。このかはの。したにもながく。ながこころまて

大の如く心ゆるされし故に、まことあこのよめる其の人のこれまでをと云て、それも其の時ひてあれバ今そといへり、されど此歌の意によりておもふる、髪のやとせとし、只に幾年の時、髪の末を切そろへて、髪を肩過ぎてといふ、とく八歳までハ髪の末を肩と斉しく切、其を放髪とも振分髪ともいふなり、同子ハ何事の意の深き、わがおなじ年ごろの、といふを訓べし、右本には子を千とあれども誤りてえゆ、八歳の後ハ髪をそのばして、其の下しれバ、

肩をすぎてなるをいふなるべし、橘のほ下誤字なるべきこの考べし、古本には紀伊国の字をあて、文字入の跡ハいかさま落句脱句あるべしの誤なるをや、そハ女の返しうた、ただの人麻呂集の歌にハ此の四首こそ一首を一つにまとめしか、私にいふ同意の内容称の物不合の歌の反歌、何為而とあるより、然有社年乃八歳叫といふ句を、最初の反歌の下にかも歌書連平、然して反歌と云ハ此一首之此長歌可以為反歌、集録誤甚之今訓之、何為而立文字につ、吾八思意を去て一首に書ひて、而して然有社よりハ又其の歌の始を用之者、天地之神尾母の言別其の歌の反歌なるべし、次に或本にハ始の然有社を此の本反歌の上にまかせ混て奥の裏本朝作人麻呂集之歌とよめる、物不合の長歌の奥にかく連る然社と云よりハ別の歌の書たる、然而本従其以て不審の次第之、同其歌を並べ共其歌一首不足也、今かく意義書に共、長歌同其の歌意以互にかるべし、然れバ此五首とあるハ誤るなるべし、

彼云此右六首とさこしとあるくこれハちやくよう乱ちなとてゆ

反歌

天地之神尾母吾者禱而寸戀云物者都不止来

あめつちのかみをもわれハいのりてきこひといふものハかつてやまずけり

是も右の长哥ハ悩つらかくぞ上の何為而恋止物序といふその将くるふ

ておる哥ふハあらざるべきか

柿本朝臣人麻呂之集歌

物不念路行去裳青山乎振酒見者都追慈花爾太遥越

賣作樂花佐可遥越賣汝乎叙母吾爾依云吾乎叙物汝

爾依云汝者如何念也念社歳八年乎斬髮與和子乎過

橘之末枝乎須具里此川之下母長久汝心待

壱十九春花乃禾大安盛而ミし巡禮紀男大迹天皇此大ハ太の誤ならん太をほの

このみ用ゐる遥二つとしならて太の下遥ハ遥の誤の佐可遥の作とも在る

誤元暦本ハ依るとあるハ其の男の方の未だ向落るとゝ女の方ともと合せ

る一ことせるより斬髮与ハこのるいこの誤和子ハかり多の誤なるへし須具

理ハ須蘇を延さる

右五首

隱口乃泊瀨乃國爾左結婚丹　吾来者　棚雲利

こもりくのはつせのくにゝさよばひにあがくれバ　たなぐもり

雪者零来奴左雲理　雨者落来　野鳥　雉動

ゆきハふりきぬさぐもり　あめハふりきぬ　のつどりきじハとよみ

家鳥可鷄毛鳴　左夜者明此夜者旭奴　入而旦将眠

いへつどりかけもなきさよハあけ　このよハあけぬ　いりてあさねん

此戸開為

大皇寸與ハ夫寸美與ノ誤カ

このとひらのせ

古事記ハ手斉神出雲の佐用波比尓ゆく佐怒都登理岐藝斯波登与牟尓波津登理加祁波那久など　継体紀勾大兄皇子の出雲を同語なりとたゞ理のたハ鍛語か、文ハ鍛の異に、ぬつとり鶏、さよハあけゝ、遠近をよ而をさへ降く姓鉢ふふもらで明るこ、ねこつせハねりけと近ら、

雫来の下奴一本ふそし

反歌

隠来乃泊瀬少國爾妻有者石者履友猶来来

こもりくのはつせをぐにつまあらばいしはふむともなほきたりける

はつせをぐにハ、しめの国なとにいふ歟

隠口乃長谷小國　夜延為　吾大皇寸與　奥床仁

こもりくのはつせをぐによばひせすわがせのきみよおくとこに

母者睡有　外床丹　父者寝有　起立者　母可知　出行者　父可知　野干玉之　夜者昶去奴　幾許雲　不念如　隠嬬香聞

はゝはねぶりとつとこにちゝはねたりおきたゝばはゝしりぬべしいでゆかばちゝしりぬべしぬばたまのよはあけゆきぬこゝだくもおもはずごとくしぬびづまかも

長歌のびてからうして通ふを詠たるにて、大は一本夫に作る、吾大皇寸與は吾夫寸美與とあるが誤れるなるべし、考海云、大は夫の誤りにて、皇寸は尊一字の二字に誤れるなるべし、あがせのみことと訓べし、いづれにてもあるべし、人と共にありて訓ふこともあれど、出ゆかで戸口へ出ハえ定ちる、末二句おもはぬごとくしぬびづまのかくよるらんといへるも、猶考べし

反歌

川瀬之石迹渡野干玉之黒馬之来夜者常二有沼鴨

かはのせのいしふみわたりぬばたまのくろまのくるよはつねにあらぬかも

黒馬とあるはうめを烏梅とかけるがごとく字音をとれる也。あらぬかのもじ

はよはなきにあれりとみゆ、こゝの心は親まもられて君は毎夜来まさぬ

あつましものをとぞ此後をねがふ

右四首

次嶺經山背道乎人都末乃馬従行爾己夫之歩従

つぎねふやましろぢをひとづまのうまよりゆくにおのづまがかちより

行者毎見哭耳之所泣曽許思爾心之痛之垂乳根乃

ゆけばみるごとにねのみしなかゆそこおもふにこゝろしいたしたらちねの

母之形見跡吾持有真十見鏡爾蜻領巾負並持而

はゝがかたみとわがもてるまそみかゞみにあきつひれおひなめもちて

馬替吾背

うまかへわがせ

つぎねふ枕詞、反哥に泉河といひしは、古へやまとより行人の山しろへ行みちをいへるなるべし。人づまは他人の夫をいふ、おのづまはおのれが夫をいひて例多し。

たらちねの枕詞、まそみ鏡は、真澄(スミ)の鏡の轉る語也。あきつひれ、女帯の衆の領巾をもいふ。これは類聚雑要式は飛亮紫末を載たる、鏡の具の比れなるべし。鏡に添たる比れは蜻蛉の羽の形したる物なれば、あきつひれといふべし。おひなめもちては、右の二つを並べ身に持ゆきてといふ也。ゐることはるしかへよの略、たゞへは物しぬしをおもへればこ

反歌

泉河渡瀬深見吾世古我旅行衣裳沾鴨

いづみがはわたりせふかみわがせこがたびゆきごろもぬれむかも

延喜式雜式云、凡山城國泉河樺井渡瀬者、官長率東大寺工等、毎年九
月上旬造假橋〳〵、本業を蒙ま語れるまでなれは略つ

或本反歌曰

清鏡雖持吾者記無君之歩行名積去見者

まそかゞみもたれどわれはしるしなしきみがかちよりなづみゆくみれば

あるもとはかひなしとよめりのかゝし、なづきよるとも

馬替者妹歩行将有縦恵八子石者雖履吾二行

うまかへばいもかちならんよしゑやしいしはふむともわはふたりゆかん

卅一首男の答哥也、これは婦降近き時のうたで、なにゝく婦と夫と二人行時
のうたをかねていへる也清濃の哥は反哥まで此る贈答の哥を和歌とて
人々が歌とる也

右四首

木國之濱因云　鰒珠　将拾跡云而　妹乃山
きのくにのはまによるといふあはびたまひろはんといひていものやま
勢能山越而行之君　何時来座跡玉桙之　道爾出
せのやまこえてゆきしきみいつきまさんとたまぼこのみちにいでく
立　夕卜乎　吾問之可婆夕卜之　吾爾告良久吾
たちゆふうらをわがとひしかばゆふうらのわれにのらくわぎ
妹兒哉汝待君者　奥浪　来因白珠　邊浪之
もこやながまつきみはおきつなみきよるしらたまへつなみの
縁流白珠　求跡曽　君之不来益　拾登曽
よするしらたまもとむとぞきみがきまさぬひろふとぞ
公者不来益　久有　今七日許　早有者今二日許

きみはきこえぬひさならば、まちぬのおほのわたやのうばまよつのばのう
将有等曽君者聞之二二勿戀　吾妹
あらんとぞきみはきこし、なこひそわぎもこ
此人国なをず、まうらけし時、紀の海はむの名有不からず拾くまんぞと云
てかしとりてかくいつる、妹の心せのこ、よるとふ、夕トは日の岩ずのかるなれ
なりは、されはのちくは他人のもの語しることをゆふ、かきるとをのまさ
たるれば、即それと叔ま告ふ語とれて、つらくよ例されど、トゑはのさと
はかなることし、久有の下者の字を落さか、巻八今二日けあらば安からん
巻九去ゆきこは七日ハこらじ、巻十七ちかよ今くあらバ今二日らみ遠く
あらバ七日のうちハさとあやしとりしよめか、かな来てわぎもまでらの語え、心
も女の許のあでなきく

反歌

杖衝毛不衝毛吾者行目友公之将来道之不知若
つゑつきもつかずもわれはゆかめどもきみがきまさんみちのしらなく
杖をつきもしのてをかりて、なまれ遠りくるとしらなくに、巻三長歌、天地の知れ
るまで杖つきもつかずも行てもよめり
直不往此従巨勢道柄石瀬踏求曽吾来戀而為便奈見
ただにゆかずこゆこせぢからいはせふみもとめぞわがこしこひてすべなみ
ただにゆかずとは、石瀬ふむをとこえくるゆゑ、こゆはこゆよりなりく、こせぢよりよ
まはりてゆかれるを、からハよそとて、そハ大和のきたのよりある女の方文など
よく紀路へゆくしばの路の勝とゆく時、ましへ迎へしたるなし
こころハあられねど、同し度の方のなる大和の友方の次を載せし、之
と翁ハいえれきさ、宮本ハ在て同じ女の方なるべし、左の方のなくとなとし
それども、なれば思ひよせて出る紀なんといへり

郎ハ娘ノ誤

左夜深而、今者明奴登、開戸手、木部行君矣、何時可将待

さよふけて、いまハあけぬと、ひらきて、さへゆきつきこと、いつとのまてん

右の男きつくしのちく又此の歌へ行を、女の樹よみる方ら又ハ先よう

二ツハ右の贈答なしみるべし

門座、郎子内爾、雖至、痛之、戀者今、還金

かどにをるをとめハうちにいたるとも、いたくしこひばいまかへりこん

門まで送りる女の、わが居の内へゆり入ほどの事の、るちなしとりて、ここの末ハいて来てきのバ、の、ゐ御ゆりまんでと、いひるべ、さあくおすく、郎子ハ娘子の誤なるべし、考の説に寄る、金ハ、音をかりるまで、將来へ

右五首

譬喩歌

師名立、都久麻左野方、息長之、遠智能小菅、不連爾、

志なてるつくまさぬのふ、おきなかの、をちのこすげ、あまなくに

伊苅持来、不敷爾、伊苅持来而、置而、吾乎令偲、

いかりもちき、しかなくに、いかりもちきて、おきて、われをしのばす、

息長之、　遠智能子菅

おきなかの、をちのこすげ

志なてる枕詞、都久麻と息長ハ近江国坂田郡之、志のれバ左野方ハ其の箱摩の内、遠智ハ息長の内の里なるべく、諸陵式息長墓在近江坂田郡と見、此男箱摩の額田ニ住ミ、遠智とりふ所の菅をも刈持来ふ、といふ、菅七ふ志類づくとちの菅原ともよめれバ、菅と並ぶ布なるべし、左野方のたいをゆ語、いうの、いと名語之、さとく薦のあとなとのろく、後ニ刈りて来ぬくとらふハ、此女の鍾ニ侍ふさまなるべし、家

るまゐることをなげくへ、卷十三にも、よしのこくずの葛をおよらく刈のこ
刈てふれらんや　と有。翁のいつくまゝにてびりは、こゝろみと作て欽く
よつきて近くいふ。さおれ此は古人の心をあはぬることぞかりとい
われき。古風を好むよむもの稱ることとまねぶくひあれば、こまろそ
ちまてすちずし、又はわづらし。おくのし

右一首

挽歌

挂纏毛。文恐。藤原。王都志彌美爾。人下。
かけまくも。あやにかしこし。ふぢはらの。みやこしみゝに。ひとはしも。
滿雖有。君下。大座常。往向。年緒長。
みちてあれど。きみはしも。おほくいませど。ゆきむかふ。としのをながく
仕来。君之御門乎。如天。仰而見乍。雖畏。

日ヲ曰ニ誤

つかへきて。きみがみかどを。あめのごと。あふぎてみつゝ。かしこけど。
思憑而。何時可聞。日足座而。十五月之。多田波思家武登。
おもひたのみて。いつしかも。ひたらしまして。もちづきの。たゝはしけんと
志みゝは繁き也。人下の下は詞。卷廿人さはに滿知足波安礼杼とよめるが、
君下の下も詞。おほくいませどとは、皇子たちはあまたいませども、
かくいふ也。大は多の誤也。翁は、おほましませどとよみて、おほしますといふは
大ましますの略といへれど、いかゞあらん。従ふひは、皇子たちをいふにて
君はませども、わきて此君によせて仕奉るといへり。猶ひたらしは
末の語を結ん。むかし、古事記清寧天皇時語に、何爲日足
奉ト白。取御母。定大湯坐若湯坐。宜日足奉。とし、是を禮子の日を足らする
を云。十五の下夜の字落たるか。たりもんと滿湛るへ。卷二同並字
命殞の時の事ありて、此月の滿波之計武跡とよめり

吾思皇子命者。春避者。殖槻於之。遠人。
わがおもふみこのみことは。はるされば。うゑつきがうへの。とほつひと
待之下道湯。登之而。國見所遊。九月之四具禮之
まつのしたぢゆ。のぼらして。くにみあそばし。なが月の。しぐれの
秋者。大殿之砌志美彌雨。露負而。靡芽子乎
あきは。おほとのの。みぎりしみみに。つゆおひて。なびけるはぎを
珠手次。懸而所偲。三雪零。冬朝者。刺
たまだすき。かけてしぬばし。みゆきふる。ふゆのあしたは。さし
楊。根張梓矣。御手二。所取賜而。所遊
やなぎ。ねはりあづさを。おほみてに。とらしたまひて。あそばしし
我王矣。煙立。春日暮。喚犬追馬鏡雖見
わがおほきみを。けぶりたつ。はるのひくれに。まそかがみ。みれど

不飽者萬歳。
あかねばよろづよに。

殖槻ハ考物語ニ敷下郡殖槻寺とあり、此ハ其寺ノ殖槻ノ岡中のあた
りにありし。まつ人ハ枕詞。まつの下道ゆ行々登て、國見遊ハし、其後遊
のけるれバ、よくおもしろき枕詞、扨てしぬばしハ偲んでかけてし、さし柳
枕詞、梓とのとりしくらのかうせう。上の根張ハ刺本にしてる枕の根
といふまくら中の序にて、法梓とハ大きの別名之、御手の上、大の字を
脱せり。煙立ハこのところをいふ。春日のくれにハ出をぎ日も暮までふし
いつを略ていつまで落枕詞、

如是霜欲得常大船之憑有時爾。涙言。目鴨迷。
かくしもがもと。おほぶねの。たのめるときに。なくよれのめかもまどへる。
大殿矣。振放見者。白細布飾奉而。内日刺。

おほとのをふりさけみれバしろたへにかざりまつりてうちひさす

宮舎人方一云者雪穂。 麻衣服者。 夢鴨。 現前鴨跡。

みやのとねりハたへのほのあさきぬきるハいめかもうつゝかもと。

雲入夜之迷間。 朝裳吉。 城於道従。 角障經。

くもりよのまどへるほどにあさもよしきのへのみちゆつぬさはふ。

石村乎見乍神葬。 葬奉者。 往道之。 田付叫不知。

いはれをみつゝかんはふりはふりまつれバゆくみちのたづきをしらに。

雖思。 印乎無見。 雖嘆。 奥香乎無見。 御袖。

おもへどもしるしをなみなげゝどもおくかをなみおほみそで。

往觸之松矣。 言不問。 木雖在。 荒玉之。 立月毎。

ゆきふれしまつをこととはぬきにはあれどもあらたまのたつきごとに。

天原。 振放見管。 珠手次。 懸而思名。雖恐有

あまのはらふりさけみつゝたまだすきかけてしぬばなかしこかれども

逆言ハ流言ヶ妖言の謂にておよそれかよ出し言の下一本可の字あり誤なる

ふさはしからぬ人の言速ハなれバ白栲にて侍るとあるハ舎人の喪に仕へまつれるを

いへる也 いはゆれき室舎ハ言霊の下ぶるおほるゝげのまへる意なりと用る逆

つまはよれといふ言を打の上川に集中所々有 たのしき一族乃殻とも

えしかてたへハ白布の名にて即ち雲とも見えてる也 孝子十一年 數白

もおかり麻衣喪にハ公私ともに白麻布を用る事孝徳紀などに見ゆ せ

見るべし 純色ハ陵の事也 くもりよのまきもよし 迷間まどへる

はしみとも例べし 巻二にもあり そは纏ると同意の喪にいふれバ文字によるれ

葬まゐらする地なりとも山を守るがのぎ 紀へきて城の上の都を此南に今

いはれとはよ出る 巻三角にも石村と泊瀬山にハつゞきてよめる 夜ハ文の子

にとよあるハ泊瀬の方よりよし向く行時 之比ハ藤原都より南なる

皇ハ王皇ノ誤カ

白らいも石村にをさめんとて送まゐれるをとほく幸すに堺於道ハ堺と
郡の磯城といふをいへり、又毛え堺と此地の太子いはくなれバ、
廣瀬郡の堺辺とこゝろ得べしとあれど此説おぼつかなし堺於ハ廣瀬
郡の堺在なるべし、さるハいかん、なればこそ、下の白ハ太のびなるらむを
誤なるべし、とまれかくもいへ、ハ、ハふるかむと見えたり、ようやるしと云行なり
松よ国見遊ぶしといひ木の松をとも、あらきの枕詞じしと略て月はて
なりて山よりの茱月をのへ、かたきけるつハ太の松を称えるくされバ天の
原といへるハ天をゝくあらくあつぶるへるさまされども原ハ如の字の誤
なるなりん、あらんのごとく訓べきなり

反歌

角障經石村山丹白栲懸有雲者皇可聞

つぬさはふいはれのやまにしろたへにかゝれるくもはおほきみのかも

皇ハ五皇二字の一字を誤れるなるべし此ハ藤原宮の御宇にしる時ハ
大葬の御をまゐらせたるにあらずといへれど、皇極紀に皇孫建王のみまかり
給ひし時の御歌にいまきなるをむれのうへに雲だにもしるくしたゝば何か
なげかんとよみ給へれバ、ただ白雲とのみいへるも、石村ハ其の陵あるべき
所なれバ、雲を皇とも見べきとなりいへれき、さて如しも葬まゐらせし所をいふぞ
よしなしといふべし、此の哥は或人高市皇子薨ませし時の
ものといへるハ叶ハず、何ぞといへバ、日並しまして後ハ、そらし給ひし
いづるを誤と注ぎ、二十年にして都ぞまでハいませぬ故に
よくはかりて哥ひまつる高市皇子命の薨ませしハ持統十年なるべしたゞ
れバよしなし、又高市皇子命の陵墓ハ廣瀬郡三立岡にある也、日並皇子二
の日並皇子命と申せし諸名の堺上殯宮とての堺於道とハおもひてかく有れ
ど彼ハ廣瀬郡城上ニてハ堺上殯なるべきよしつゞけに論らはれき、今は持統

日並しの皇子と申す也この石村山と葬ませし地と定しけるは高市皇子命
の薨の時の歌にあらじとおもひくだせる論らひは日並皇太子にあらずして皇
子のみこといへる例なければ高市皇子命の薨の時の歌なるべくその城於の宮二
の伝語の城上を同じく度会野とあるべしきのへの道ゆくはをきのへのうへ
新道ようりといへるも京へ紀ろをとこやこ縁ふる歌ひけるならしさて日並し
ますことをいへるは此皇子命の御事雅くおりしませしより仕奉りし人のよめる
なるべし又石村山をいへるは大かたいへるごとく必しも葬まつりし山ならざれども
わかれの悲しきをそへて清哥新をとなのうへことなるべし

右二首

磯城島之日本國爾　何方　御念食可　津禮毛無
しきしまのやまとのくにゝいかさまにおもほしめせかつれもなき
城上宮爾　大殿乎　都可倍奉而　殿隱　隱在者
きのへのみやにおほとのをつかへまつりてとのごもりこもりいませば
朝者　召而　使　夕者　召而使　遣之　舍人之
あしたにはめしてつかひゆふべにはめしてつかひつかはしゝとねりの
子等者行鳥之羣而待　有雖待　不召賜者
こらはゆくとりのむらがりてまちあれまてどめしたまはねば
劍刀　磨之心乎　天雲爾　念散之　展轉
つるぎたちとぎしこゝろをあまくもにおもひちらしこいまろび
土打哭杼母　飽不足可聞
ひづちなけどもあきたらぬかも

しきしまの歌也つれなき此言は連もなきといふことにて縁もなきと云事也ここにては
集中に由ありよろしき例なし城上宮は此二言高市皇子尊城上殯宮と
あるを以て同じく殯宮の時舎人の中にてよみしなるべし大殿とつゝ人

まて八條を造仕奉之、嶮原八條の内にてまちてよむ、舎人ハこの仕下舎人が
待侍の下、侍門まだ出ることをいつり、群而の下待ハ侍の誤か、おもれてさまよひと
よむべし、剣刀指佩、とぎすハ宮人の佩るを思ふ物と見すんとよめる、天で
まだ散らしハえやのかく かくのを略て与く心の中のかく乱れでよむ
卷二、行あも家といつるがごとし、こゝはまろび伏しまろびこひつちハ涙の濃と
同此歌のまた友云ののちへあるるをこゝハ落ちえしなん

右一首

百小竹之三野王。金厩。立而飼駒。角

しぬのみぬのおほきみにしのうまやたてゝかふこまひんがしの

厩。立而飼駒。草社者。取而飼旱。水社者。挹而飼旱。

うまやたてゝかふこまくさこそはとりてかへみづこそはくみてかへなにしか

何然大分青馬之鳴立鶴

なにしかもましろのこまのいばえたちつる

百しぬの枕詞、三野王ハ天武紀に徴美濃王乃參赴而從矣、また小紫美濃王と又

栗隈王之二子三野王武家王とし、又橘氏系図元明の紀にかよひしるくて和

銅元年五月辛酉從四位下美努王卒、孝徳紀に美努王ハ栗隈王の子諸兄

公の父なるよしみゆ、それなるべし、金角ハ西東に耽もちるをいひてかくいへり、旱ハ

かふのかみに作るハ誤ならで、宮ちら旱ハ背の誤まくかひなるべし

旱ハ多男にせあらず、そもくさぬをいくなるを、なにくかはんものといはし

うま鳴ぞくいふといへり、さて東西の厩をいふハ多くのその けしいへと

ても鳴立ハつれなく鳴をいふ、大分青馬ハただ白くあるを云と冠辞考に

委しくいへれ、桜ハ大分青る、ひたをのこまとよまんか、記ハ継体紀に

純男ひたをとこよあるをもて大分もさよむべし、卷十六人魂の佐青有公がたゞ

ひとりあひつりし依ハ義語多く、あをき思ひて、をとのひとハ先ぬさえたの夜

哥の衣手の枕詞ハ常陸とてくゝと同じことをしるべし

反歌

衣袖大分青馬之嘶音情有鳬常従異鳴

ころもでのまそを(ひたを)のこまのいばゆるこゝろあれやもつねゆけになく

衣手の枕詞、あれやもハあればこのばを思ふる給へ

右二首

白雲之　棚曳國之　青雲之　向伏國乃　天雲

しらくものたなびくにのあをぐものむかぶすくにのあまぐもの

下有人者妾耳鴨　君爾戀濫　吾耳鴨夫君爾戀禮薄

したなるひとはあのみかもきみにこふらんあのみかもきみにこふれば

天地満言　戀鴨　胷之病有　念鴨

あめつちにいひたらはしてこふれかもむねのやめるおもへかも

意之痛　妾戀叙　日爾異爾益　何時橋物　不戀時等者

こゝろのいたきわがこひぞひにけにまさるいつはしもこひぬときとは

不有友　是九月乎　吾背子之　偲丹為與得　千世爾物

あらねどもこのながつきをわがせこがしぬびにせよとちよにも

偲渡登　萬代爾　語都我部等　始而之　此九月之

しぬびわたれどよろづよにかたりつげへとはじめてしこのながつきの

過莫乎　伊多母為便無見　荒玉之　月乃易者　将為須部乃

すぎまくをいたもすべなみあらたまのつきのかはればせんすべの

田度伎乎不知　石根之　許凝敷道之　石床之　根延

たどきをしらにいはがねのこゞしきみちのいはどこのねばへる

門爾朝庭　出居而嘆　夕庭　入座戀乍　烏

かどにあしたにはいでゐてなげきゆふべにはいりゐこひつゝぬば

鴨今
鳴ニ誤

玉之黒髪敷而　人寐　味寐者不宿爾　大船之
たまのくろかみしきて　ひとのぬるうまいはねずに　おほぶねの
行良行良爾思乍　吾寐夜等者数物不敢鴨
ゆくらゆくらにおもひつゝ　わがぬるよらはよみもあへぬかも

白雲のこと　短歌に言まく遠く国に天涯といひて遠き国を指え　言雲は言云え天雲のたなびく　是はさて天をうつのにいひたるもして　よろ八十のかを天地に思ひはかりしといへるに同じくてはさ此の所に言葉をてらしける定むと言は是の係にく　みだれたりしてちからとはていひなげしけは　何とても八の路く　語つゞくとは語続けとく好そしもよか語て好にもるさまく孔し何とりて　いては痛くもと月のかゝれど　我哀の月のかなわともに　ろかのでしきさは夫の夢の例らのかな屋に妻の　よどかぬく　是夢和のさまをいへるなり　さて烏玉之黒髪布以下の九句よりの来意の中に此方挽歌のさげきてあしぬるよをいふなれ　此歌の入唐遣の書より　反歌をかけて落失たるに　烏玉之黒のみ句乱てさまく入りて　ゆ鴨と本鳴に誤れり

右一首

隠来之長谷之川之　上瀬爾鵜矣八頭漬　下瀬爾
こもりくのはつせのかはのかみつせにうをやつかづけしもつせに
鵜矣八頭漬上瀬之年魚矣令咋　下瀬之　鮎矣令咋
うをやつかづけかみつせのあゆをくはしめしもつせのあゆをくはしめ
麗妹爾　鮎遠惜　投左乃　遠離居而　思空
くはしめにあゆををしみなぐるさのとほざかりゐておもふそら
不安國　嘆空　不安國　衣社薄
やすからなくになげくそらやすからなくにきぬこそは

會山ニ誤

其破者。縫作物。又母相登言。玉社者緒之絶
それやれぬれば、ぬひつゝしまつりてあらじといへ。たまこそはをのたえ
薄。八十一里喚雞。又物逢登曰。又毛不相物者。孃尓志有
ぬれば、またつきてあふといへ、またあはぬものはいもにしあり
来
けり

あゆをとくりめは、椿の鈷に合せて出るといふ、下條の鈷をとくりあまで
十句は、くに妹といはん序なり、くくりめは古事記八千矛神の御歌の上、久俀
志賣遠あかときすてとよくうりきまをといふ、鮎遠惜は悲詔字なし、
なぐるさの地名、遠ざかりみては居てあの遠きやくもあることをかざうりは
お渡るの遠さまん、かごとまれいてと為はいてくれさ、遠ざこ下に行かむ

ありいづまの死にる歌なるべし、又しあらてはいふは、あまくくるも別へしゃどを
へまく死とようてやでり、従古本継まるつきてしは例へど嫁の下尓
高山と山を誤りて古く皆よるあるく改

隠来之。長谷之山。青幡之。忍坂山者。走出之。
こもりくの、はつせのやま、あをはたの、おさかのやまは、はしりでの。
宜山之。出立之。妙山叙。惜山之。
よろしきやまの、いでたちの、くはしきやまぞ、あたらしき、やまの。
荒巻惜毛
あれまくをしも

はつせの地名、和名抄城上郡長谷波都勢、忍坂於佐加、よりて、雄略紀據暮利
矩能播都制能野磨播伊底拕智能与慮斯企
野磨和斯里底能与慮斯企夜磨能據暮利
矩能播都制能夜磨播阿野尓于羅虞

波斯(ハシ)阿野你(アヤニ)手羅虞波斯(ウラグハシ)といふ詞、古の言ともかりひて、からうじてよめる
しくうらぐはしきを人の見るを愛て惜むも、此二山すべて一人の人の如く
かたらるをいふ、もとのことは、此言大和なる紀にはいはく、流一つとのさまし
しきこては、二山のさまをとくにちいて、たつせの山は山の尾をへりて究殘(ハフナン)
山まで引つゞけるを長出といひ、忍坂は山立のようすきしといふ、あをし
きこ山の内紀のうする婀梔羅斯枳(アタラシキ)いふあのたぐひ、うるはしく惜むこゝろ
あれやと、とにもかくにも、あとかたもなくなりゆくものは、これば此人のいへるべきなりけるとぞや
るそいあらたまぐりしきこゝも、先引べきすゝ、まづ惜む山のつひにあれ
ん惜くもよれるなりや

高山與。海社者。山隨。如此毛現。海隨。然
直有目。人者充物曽。空蟬與人

たかやまとうみこそは。やまのまにかくもうつしく。うみのまにしかもの
たゞならめひとはあだなるものぞうつせみのよひと

まにはまゝにのまゝなりといふ。山は山ながら、うみはうみながらといはんといふ也。かく
考べし。現しくはかげろふにて世にあるさま、まくはまことにたる絶えまもはかなく
も有ど、然の下古本毛の字あり。直なるめは、考にあらずいふなりとし
人はあだなるを古本花とあるぞよろし、たゞちにはかなるとよまんか。空蟬は
現身なり。巻十六にいさなとりうみやしにする山やしにするしねにこそは
海は汐干て山は枯すれといへり。右二の歌は、いにしへの代のなりのさま

右三首

王之。御命恐。秋津島。倭雄過而。大
伴之御津之濱邊従。大舟爾真梶繁貫。旦名伎爾
おほきみのみことかしこみ。あきつしまやまとをすぎて。おほ
とものみつのはまべゆ。おほふねにまかぢしゞぬき。あさなぎのかこふ

大夕卜ハ誤字ニ枉ハ狂ノ誤釣ハ鈎ノ誤今ハ鈎ニ誤

水手之音為乍夕名寸爾梶音為乍行師君何時来座登
かこのとしつゝゆふなぎるかぢのとしつゝゆきしきみいつきまさんと
大夕卜置而齋度爾　枉言哉人之言釣　我心
ぬさおきていはひわたるにたはことかひとのいひつるわがこゝろ
盡之山之黄葉之　散過去常　公之正香乎
つくしのやまのもみぢばのちりすぎにきときみがたゞかを

大伴の御津、水手のとしつゝハ舟人の声々にこゑかけて、聲はりあげて、紀伊はよ侶
て行し人、旅のうちに死たるを、其の妻の嘆きを悲しみてよめるなり
大夕卜三字ゆふけと訓べけれど句調わろく、奴佐とか幣とかあるべき字
ありしが誤れるなるべし。枉ハ狂の誤へ係ることわざし、つくしの山ハ
つくしといひ続て、末ハちりゆくときと君がたゞかのことを人のいひつるといふ
ることの続く、正香ハ其人を見んやうに思ひてまさしくの意とて、身大く

枉ハ狂ノ誤

海ハ渉ノ誤カ

反歌

枉言哉人之云鶴玉緒乃長登君者言手師物乎
たはことかひとのいひつるたまのをのながくときみはいひてしものを
左枉ハ狂の誤也。上ハ夫の死しを人のいひつるハ狂言か、さても夫ハ夫
のいひ慰めしをといひ出なげくなり

右二首

玉桙之道去人者　足檜木之　山行　野往　直海
たまぼこのみちゆくひとはあしびきのやまゆきぬゆきたゞうみ
川往渡　不知魚取　海道荷出而　惶八　神之
かはゆきわたりいさなとりうみぢにいでゝかしこきやかみの
渡者　吹風母和者不吹　立浪母　踈不立
わたりはふくかぜものどにはふかずたつなみもおほにはたゝずおぞ

跡座浪之。立塞道麻。誰心。勞跡鴨。直渡異六

しきなみのたちさふみちをたがこころいたはしとかもただわたりけむ

直海の海は前の歌にあるべし。沖の波の或本の端詞に備後國神島濱とあるのをいふは、ふかくまへのうたのなかにしぬ人おほかたにはいはんなれど、る浪の立さふりて此歌にかなしむ所、跡の字は都の字なるべし。跡座浪は二字をおきしれば跡位浪（シキナミ）とあるしとあり。跡は敷き位も座も均しく、敷坐の席は寄る時人々の位次におく座を敷設ればしくといふ。しきなみはかさなり重浪にて、立さふは浪の立障る（サフ）をいふなり。磯ぎはをいへるなり。此浪の立塞るをも歩行かしこんと見えて、[illegible]

之ハ不ノ誤

てしかせるか室ちかくこれは川に溺れて死るがたの底の海へ流れ出て礒へよせあげられてあるを、かくよめるなり。海を渡るとは、あらじといへり。

○まよはせる蘆檜木乃ここの名の家人乃ここの名の、納潭ここの名の三そ、太のもとの反斉ふりてこふ入づるよしあの考に委し

鳥音之。所聞海爾。高山麻。障所為而。奥藻麻枕所為。蛾葉之衣浴不服爾。不知魚取。海之濱邊爾。浦裳無。所宿有人者。母父爾。真名子爾可有六。若蒭之。妻香有異六。思布。言傳八跡。

とりがねのきこゆるうみにたかやまをへだてになしておきつもをまくらになしてひむしはのきぬだにきずていさなとりうみのはまべにうらもなくやどれるひとはおもちちにまなごにかあらむわかくさのつまかありけむおもほしきことつてんやと。

家問者、家乎毋不告、名問跡、名谷毋不告、哭児如、
いへとへば いへをものらず なをとへど なをだにのらず なくこなす
言谷不語、思鞆、悲物者、世間有
ことだにいはず おもへども かなしきものは よのなかにあり
名言之きこゆるはしをハ語之、古本集にハ此事の釈もきこえねばなど
此にいへるがごとく、名言之きこえねばにそへてとべきれ、之ハ不の字の
誤れるなるべし、枕所為とハ此の或本枕丹巻てと有によりて、ハ字
の誤れるなるべし、ゆくハ赤者と有る、又ハ所ハ不の誤れるにもあるべし
蛾葉之衣ハ或人の説、まゆのきぬと訓べしと云、巻十四蛾まゆのせひくハ
まゆの衣ハあれども、よあれバ此説よるべし、まゆ云、葉ハ糸の字の誤の
うらもなくハ何心もなく、真子ハ愛の子といへり、思ひきこえくハ言傳
やらまく并なま あらバ、言ずことはずハ、あいそぬとえ、おもへどもハ哀も

へどもと略き云、よのなかにありハ世の中なる事といへる也

反歌、

母父毛、妻毛子等毛、高高二、来跡待異六、人之悲沙

おもちちも つまもこどもも たかだかに こむとまちけん ひとのかなしさ

たかだかハ既出、遠く望むさま也、或本異を羅に作るよし

蘆檜木乃、山道者将行、風吹者、浪之塞、海道者不行

あしびきの やまぢはゆかん かぜふけば なみのさへぬる うみぢはゆかじ

此哥ハ右の玉桙之道去人者云々の長哥の反哥なるべし、浪の下之の字ハ
立の誤か、又ハ之の下に立の字落たるにて、さしバなみたちさふると訓
のたちさふとも訓べし、是ハ溺死し人の事を聞て、おくれたる人の心
こゝろよめる也

或本歌、

使ノ下者ハ主ノ誤

穂上毋於ノ誤カ

備後國神島濱調使首見屍作歌一首并短歌

神名帳備中国小田郡神島神社あり、巻十五月よミのさくを清ミ神島のいそまハ備中なるべし、くハ備中を備後と誤れるにやと翁いへり、使の下首ハ主の字の誤なるべしいかがあらん

玉桙之道爾出立葦引乃野行山行潦川往渉鯨名取海路丹出而吹風裳母穂丹者不吹立浪裳箟跡丹者不起恐耶神之渡乃敷浪乃寄濱邊丹高山矣部立丹置而汭潭矣枕丹巻而占裳無偃為公者母父之愛子丹裳在将稚草之妻裳将有等家問跡家道裳不云名矣問跡名谷裳不告誰之言矣労鴨腫浪能恐海矣直渉異将

潦ハみなぎらふるとよむべきか、渉ハ激の誤にて、母穂ハ母ハ於の誤なるべし、元暦本ハ母穂と眞跡にて腫ハ重の誤にて、文字を借りたるのさまとみゆ、上の玉桙之道去人者といへり、島音不所聞海尓といふ二つのちまきの間に一首よもるを汭潭定めハうちまとよまんといへり

反歌

母父裳妻裳子等裳高高丹来将跡待人乃悲

此ミの左よ悲させり

家人乃将待物矣津煎裳無荒磯矣巻而偃有公鴨

いへびとのまつらんものをつれもなきありそをまきてふせるきみかも

煎ハ烈の誤なり

汭潭偃為公矣今日今日跡将来跡将待妻之可奈思母

いりぶちにこやせるきみをけふけふとこんとまつらんつましかなしも

片岡の浪のよる所へ汭よりよせられてあるをいへるにて、おのが人の旨とかたみ玉桙之道行人者云々の反歌のさまなるべきをおもふにいへり

煎烈ノ誤

納浪来依濱丹津煎裳無偃有公賀家道不知裳
なみのむたよするはまべにつれもなくこやせるきみがいへぢしらずも

納ハ澳の誤なるべし、おきつなみこの納浪といへる例なし、煎ハ烈の誤にて納浪
字若ハうらなみとよまんといへり、此二の小島幾不而剛緒未といふ文字
ゆくおの母父しよいてるこのふ念べくなおゆ

右九首

此月者君将来跡　大舟之　思憑而　何時可登
このつきはきみきまさんとおほぶねのおもひたのみていつしかと
吾待居者　黄葉之　過行跡　玉梓之使之云者
わがまちをれば、もみぢばのすぎてゆきぬとたまづさのつかひのいへば
螢成　髣髴聞而　大士乎　太穂跡　立而
ほたるなすほのかにききておほつちをほのふみたてゝ

居而去方毛不知朝霧乃　思惑而　杖不足
ゐてゆくへもしらにあさぎりのおもひまどひてつゑたらず
八尺乃嘆　嘆友　記乎無見跡　何所鹿君之将座跡
やさかのなげきなげゝどもしるしをなみといづくにかきみがまさんと
天雲乃行之隨爾　所射完乃行文将死跡　思友
あまぐものゆきのまに〳〵いゆしゝのゆきもしなんとおもへども
道之不知者　獨居而　君爾戀爾　哭耳思所泣
みちしらねばひとりゐてきみにこふるにねのみしなかゆ

大士乎太穂跡ハ、大土乎足蹈駈の字の誤なるべきか、大土のしバおほつちとよめ
しと翁の説になれど猶よるべきよし、考ぶし、杖不足ハ仲哀
紀ニ、身長十尺とみのたけひとつゑと訓るが、丈をつゑといひし也、天
雲のこゝハ、天やしのけは頃ひていふえ、やさかハ去きをするにいていゆ

翅ヲ翅 三誤

反歌

去ての枕詞、齊明紀ニ伊喩之々乎つあくかしべのとまていゆきてハいろをちてへ
いゆのゆハ末の句のちこゆのゆの言ニひとし、夫を反くる齋の拓つれて死
ぬるあくと句かざろ夫の死し而を見えらんと思ひて追ひまちれぬとぞ.
捨まく夫の死えると出して妻のよめるぞ

葦邊往鴈之翅乎見別公之佩具之投箭之所思

あしべゆくかりのつばさをみるごとにきみがおばしゝなぐやしおもほゆ

別ハ人毎といふことを人別といひ此集ニ毎を別ともかくなり.

投箭ハなぐるやと同じく箭の事、鴈の羽をみるごとに夫の佩

しる矢をと思ひあるにつけてハ夫を忘られずと也

右二首但或云此短歌者防人妻所作也.然則應知長歌

亦此同作焉

欲見者雲井所見愛十羽能松原少子等

みがほればくもゐにみゆるうるはしきとはのまつばらわくごとも

率和出将見琴酒者國丹放甞別避者宅仁離南

いざわいでみんことさけばくにゝさけなんわかれさけばいへさかりなん

乾坤之神志恨之草枕此羈之氣爾妻

あめつちのかみしうらめしくさまくらこのたびのけにつま

應離哉

さくべしや

雲井ハひろく遠きものなるにて八雲をさへ見渡すなら井ハ居の語なる
べし井ハかゝれば余の雅を去るなべし其余の字しかるれば居と井と
同じなるやうく防人の居語なりの十羽の松原此地名のくずく委しく
れバいづくと指がたし、わくごとハ夫のかくことをいへる稚児ともいへ

更シ使ニ誤

ちはやさく、宰和 非我紀伊將和ととまらくいまいしまうし、出将久の下句の意くるなるべし。ことさけて、おさらる君を避け離れんよまうハ国をこえかへるこそ離こゞきて、他国の住るなる卒みて来て避るよく眠あり、此きくるといふハ死別之、旅の気の気ハ月日といふんがやし、妻七行とけバ奥ゆきけらん みちのくよりきつるかさくべきものこえそ来ぬさも欲見の欲ハ語すく放ち、みさくれバそ見べしとにて

反歌

草枕此羈之氣爾妻放家道思生爲便無

くさまくらこのたびのけにつまさかりいへぢおもふにいけるすべなし

或本歌曰羈乃氣二爲而

ちるのつまさくべしやハ、女の我くといひ、夫ろのつまさてかハ夫をいふ字小波むくまされ、ちるる我久老しいつるハその松原のくしきさらうあらふ

右二首

何ぞれバ此のいるのの意国傳とまるべきさまうくんなれバ妻子ハ偶るるしてあるるうらとバのうてこれハ住るき住るるくさんとき彼結乃の歌ちらべし 卷九 淡海山の奇よ新治(ニヒバリ)乃鳥羽能淡海(アフミ)とよめれバ此あの十狗しるとゆやよつるらバ常陸るるの住まるしし知べのうかで

010190519274